

「農業・食料システム再編への社会的接近 ―バイオテクノロジーを軸として―」

中国農業試験場 立川 雅司

1970年代後半以降、欧米の農村社会学者の間では、農業・食料システムへの関心が再度高まってきている。こうした関心の高まりの背景には、農業生産のあり方の変化が、過度の集中化による農家数減少、環境問題、国際的な競争関係の激化などを通じて農村に大きな影響を与えるようになってきたことと無関係ではない。また農業生産システムそのものも、バイオテクノロジーや環境保全型農業など新たな技術開発によって変化し、それに伴い農業生産者のおかれる立場も左右されるといった事態が生まれてきた。こうした事態も農業・食料システムに対する関心の惹起につながっている。

ここで用いられる農業・食料システム (agri-food system) とは、農業及び食料に関わる研究開発、生産、加工、流通、販売、消費にいたる諸活動の連鎖全体を指す用語として用いられる。農村社会学者が、農業・食料システムに接近する場合の基本には、こうしたシステムを社会的に構成された (socially constructed) ものととらえ、その背後に存在する関連主体間の交渉・強制・説得といった社会過程自体を研究の対象とするという考え方が存在する。こうした考え方は、技術開発やその成果 (機械、作物、家畜新品種等) にも適用される。例えば、新品種の種子それ自体に、農業・食料システムに関わる諸主体の交渉過程が体现されているのであって、その意味でこうした種子は、自然物 (nature) ではなく、むしろ社会・文化的構成物 (culture) として理解すべきものであるといえる。

近年の農業バイオテクノロジーは、商品化段階に移行したといわれている。かつての革命的な技術変化への期待は、より現実的なものへと修正されつつあるものの、なおその農業・食料システムに与える影響は大きなものがあると予想される。報告の中では、農業技術がこれまでいかに農業・食料システムを再編してきたか、という点について欧米の農村社会学において提起された考え方を整理することを通じて、バイオテクノロジーの影響を把握する視点を提示する。ここでの要点は、新たな技術開発が、農業・食料システムに関連する諸主体の役割、或いは主体間の連鎖 (ネットワーク) を再編するという点にある。

本報告では、こうした欧米のアプローチの性格や研究動向を踏まえつつ、農業・食料システム再編の研究に際して、いかなる点から農村社会学が貢献できるかを明らかにする。但し、今回の報告では、欧米の実証研究を参照しつつ、報告者による分析枠組みの提示や、従来の農村社会学や農業経済学とのアプローチの相違に言及することに重点をおく。